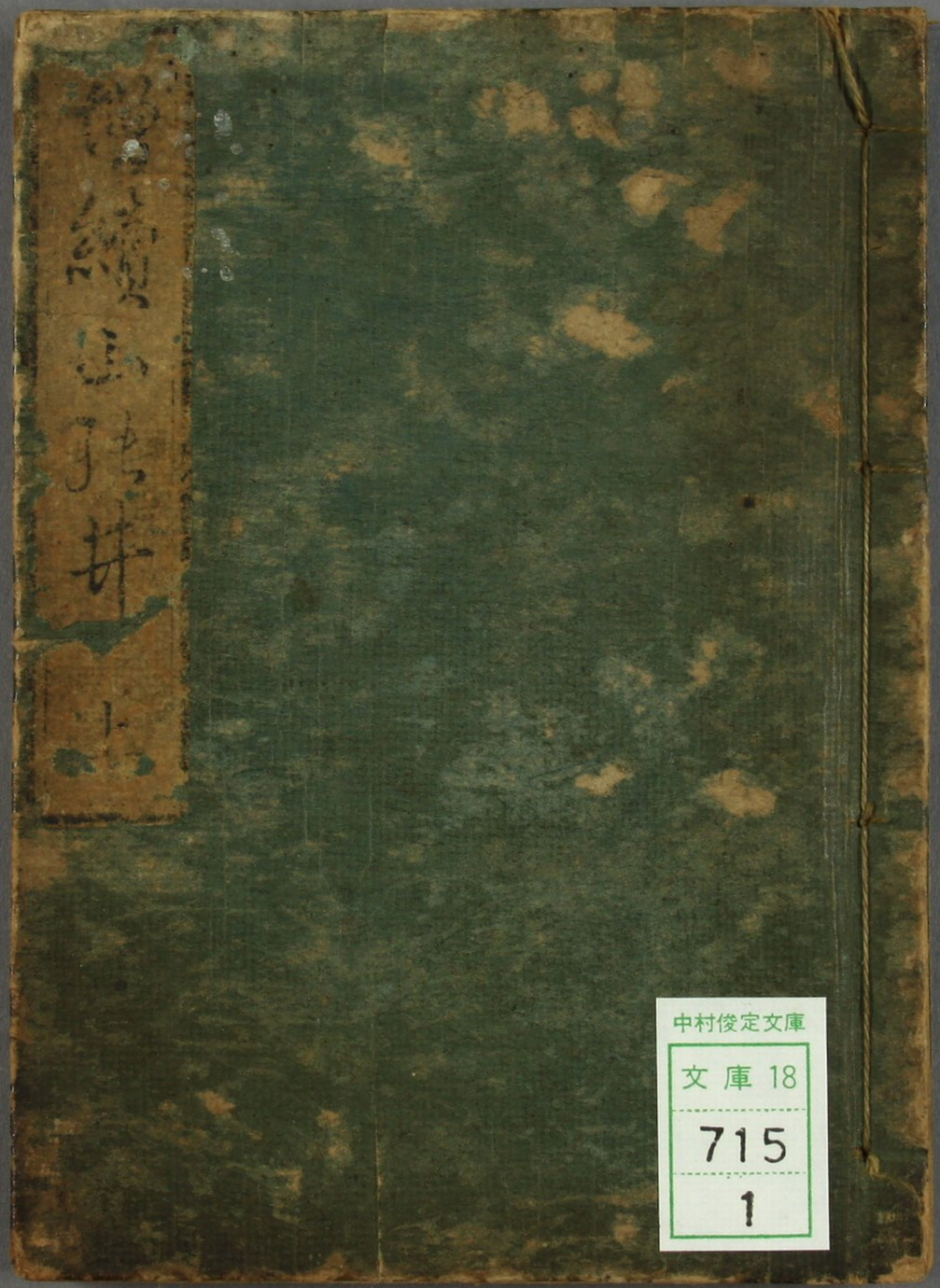

中村俊定文庫
文庫 18
715
1

增續丛之井

副錄

發句切字　四季詞寄
句數去嫌　雜之詞
同字別吟　假名遣

發句切字

ら　佰字のかるもつむ小　そがる　かもる
らん　む一字まねといて　めり　や
なし　いるし　さぶる　かし　も
かゆのうふよかろふか　や　いのいこそ
つい　づれ　いづこいづくいづち　ある
さそよ　ぬ　おりぬいかまこふのぬいかまあらん

ながむら
現在未収切字
くるまいかまい切字

太大器也あるを考へし也かよ

下知の切 人の切 二字切 をはへし

大はる〳〵 三名切 三匹切とも 玄妙切 七ッのや

口あいのや ちや 指や 鞋や

中のやゝそのや そこのや こゝのや 毛ふかい所作を作し

和人の分別を学こ

このし 現在 白〳〵 しら〳〵

未来 へ〳〵 あし そう〳〵ます

此二ッい切字なり

こ去 あし

此分切字なり 忌〳〵 おろし なろめし

○ふの如 おりん如

とひぬる とひず とひぬ 生分手切字こ

とはぬ 生分ふの如切字なり

太ぬの字の下になるの字分い手くるの字分

らるゝてぎに通ふをふのぬと云切字

なるゝ又へけ〳〵せて〳〵えめ〳〵れのかるゝと

うつる如いまさる
へ如ちり如ちそ。如さけ如きえ如よめ如
さそ如ら等し

俳諧之式

○百韻

面八句 七句メ月ノ定座

裏十四句 九句メヨリ月カ秋カ十三句メ花定座

二ノ面十四句 十三句メ月ノ定座

二ノ裏 初裏ニ同

三ノ面十四句 二ノ面ニ同

三ノ裏十四句 二ノ裏ニ同

名残面十四句 三ノ面ニ同

裏八句 七句メ花定座

○七十二候 百韻ノ三ノ面裏一折歟タルヘシ

○四十四 従序ニハ百韻ノ二ノ面裏三ノ面裏ト二折歟タルヘシ 世吉ト書

○源氏行

面六句 五句メ月ノ定座

裏十二句 七句メヨリ月カ秋カ十一句メ花定座

二面十二句 十句メ月定座

二裏十二句 初裏ニ同

余波十二匁 二面二冂 裏六八匁 五匁メ表 定座

○歌仙 源氏行ノ二ノ面裏一折 移タルニ

○米字 源氏二百韻ノ三ノ面裏二折 八十八吟成

○五十韻 百韻ノ初折二折十リ

○首尾 面八匁裏八匁 ○面合 面八匁斗

○句数 并去嫌

雲 冂季五匁 秋 三匁 二匁 冂季五匁 夏 冂季五匁 冬 一匁 三匁 二匁 冂季五匁 二匁 冂季五匁

神祇 三匁 一匁 二匁 釈教 三匁 仏祖ノ教ヲ云 非祇トハ

恋 三匁 一匁 二匁 山 三匁 一匁 二匁 水 三匁 山ヲ水ヲ

述懐 三匁 一匁 二匁 人倫 二匁

居所 三匁 一匁 二匁

旅 三匁 一匁 二匁

生類 二匁 一匁 二匁 植物 二匁 一匁 二匁

植物（二句）本よ草ト竹ると〻うく多くの物ゝ竹ト竹ト五句ゟ
名所（二句）ゟ〻多くの
秋分（三句）ゟ〻もるるく（一句ゟてもるゝ）
降物（二句）ゟ〻多くの雨ゟるゝ〻ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ
（二句）
雪物（二句）ゟ〻多くの霰雪霜ゟ
○句去ゝ事
人倫人名所（二句）ゟ〻多くの衣（三句）衣裳（二句）ゟ〻多くの字五句袖ト袖三句ゟ
（二句）
国名（二句）ゟ〻多くの名ホト玉の名も二句
時分（夕ハ夕ト〻く三句去
朝ハ夕ト〻く二句去
夕ハ夕ト朝ハ夕ハ雖歩越）
天象（二句）ゟてもよ〻二句
降物（二句）ゟ〻多くの雨霰雪霜ゟ
（二句）
地儀（二句）ゟ〻多くの地ホト名所ゟ

二字かゝる火餅風辨朝夕と夕と朝ゟる時分日月星と朝ゟる光り抔本と竹と朝ゟる極抔忠孝敷と朝ゟる生数（六のゟ二句去ゟ）
同字生数（六のゟ二句去ゟ）抔物時分夜分衣裳速信
居所旅辨神祇釈教恋常山数
水急（六のゟ二句去ゟ）
辨のゟゟ去ゟ（一句字ホト朝ゟ越ゝとも
去ゟとゟく朝ゟ）

（一句ゟてもはゝ一句字ホト朝ゟ越ゝとも大概二句去ゟ）
音訓ゟく朝ゟれホト朝ゟゝゟ
去ゟとゟく朝ゟゝ本の字と本の字一方抔朝ゟゝ二句

月松竹田羹汲枕衣舟煙同季
（此かハ五句志而おもくてもはし月を五句去とハ而とくてのる
るく同而よ月二ツをも但月次の月ハ半空まあくん）

同增補彩撰

又母 男女（人偏の兄例ク二句てもよし） 亜 誰身獨嫉（此又ハ人偏のつゞ
くく人偏と空て
も合をとるへくん） 僧寺（此ハ人偏ニあくん乖ハよ
おくとハへくもつゞ合をとるへくし） 親王
皇女 天童 天女 御門 帝 仙洞 彩院 鬼
佛（此十ハ古式よ文しの設あれとも人偏よ
二句去へくし御門ハ尾ハよ三句去へくし） 若菜 郭公

松虫 水仙 冬籠 三日月 尾上（此七ハ百負よ変して
二ツあくん） 雪 雨（此二ツハ百負よ心ひよくし） 松ノ
酒（此ハ尓よ日用のものゝ名ハ一字よ二ツ
但又ハ一ツあくんのをも一字の尻後よ
ても俳語よ用るし） 魚虫車飯餅茶
日よ天科 死よ吉野（此二ハ尓
ハし） 綾よ
秋夢 瓜木よ妻 欲よ木ハ 薬よさくら 墨染
の菖よ水色 山伏よ山杜夜ふ（此七ハ尓を古式の娃ひあるを
今ハ式よ此ハ仕なし）
雨加速火時窯 眠の字 紀の字 亜 砧（此ハ尓を
古式よ

夜々と(ママ)ともに夜々と
宝てき(ママ)念とる(ママ)ゝ(ママ)の 冠よ烏帽子 綿よ本弾 夕立
小雨 雨よ笠 烏よ狢 此五ふを古式よつけ今ときゝ八ときと伝
今のちひ 弥生 師走 此二ふを古今ともに実名の月名ゝゝときて古
あり こゝと燥土をもし古今の通称なり
山峯風巽 此にいつも九例ゝ
○同字別吟
春日よ雲も日も 衣笠よ紫 鈍よ鈍 庭我家
勾欄 勅令よ令 弥陀弥勒よ弥 代よ代物

関白よ実中風よ中中南無よ無氷撰よ
撰 行よ行 軒よ花形 難波よ波 狸よ竜
天智天皇よ天目 玉水よ水 地蔵よ蔵 金よ
子 孔雀よ雀 盂蘭盆よ蘭 三日月よ日 蜩よ
日も暮も 山よ渓 今朝よ今 皆是年是日
も今の字ゟ(ママ)ゝ 幾日よ日 仮日よ日 昨之日よ昨 月
よさみだれきたり 弥生のたゝひ戸よ上戸

下戸(ゲコ) 天下(テンカ)を下手(ヘタ) 芙蓉(フヨウ)を泉(イヅミ)と海月(クラゲ)を月(ツキ) 西王母(セイワウボ)を母(ハヽ)と百合花(ユリ)を百(モヽ)の字(ジ)と比(クラ)べ類(ルイ)を量(ハカ)るなど大概(タイガイ)を准(ナゾラ)へ吟味(ギンミ)をへず

假名遣大概

一中乃(ノ)えと書(カク)中(チウ)をゆとよむ中のえをとる

一越(エ)ると書(カク)消(キエ)ると書(カク)関(キエ)ると書(カク)覚(オボエ)ると書(カク)炊(タク)ると書(カク)肥(コエ)ると書(カク)報(ムクイ)ると書(カク)絵(エ)ると書(カク)

一をと越とよむかない甚字のごとくなれどよみくるわるきを以て越と仮名(カナ)とす

一塩(エン)いり庵(アン)かく雑(ゾウ)ると書(カク)巌(イハホ)と書(カク)小乃字つまも詰のとる

一舟(フネ)をまと小路(コウヂ)を加(クハ)と小川(ヲガハ)を川と山(ヤマ)小倉(クラ)を巻(マキ)と巻(マキ)と小柿(コガキ)をかきと小野(ヲノ)をのと袖(ソデ)を袖(ソデ)と小車(コグルマ)をぐるまと小詰のと成へし

まりを　琴ゆを
一をとるべくなどいづまも詰乃をこ
をしめるをしまる　こゑもれをこ
物乃きいづまも詰のをこ
とづま　琵のとと　風よをと　とと川　とと川
まり此当とと　いづまも奥れそい有べくます
一との事　とのづくり　こゑもれくの
おそいをこくる

袋ゆを　琴ゆの

一をこるしとと女房花とらきり　詰のをこ
一をんなとと詰のをれとことと奥れこ
一奥乃れ書申　大の字いづまもれくのれ放へし
れそら大変おほく大方れそうと大変　れそうと大原
れか江山大江山　おほこと大海おほ井川　大井川　はれいづまもれ
一尾の字いづまも奥れれるへし　くのおるへし
れのへ尾上　山まりれれ乃まりお

一ゐの字いづまも奥乃れるへ
おります　おりめ　おろんとき　こゑおと
一端のへを書牟　ふへるへ　こよかよそへいづまも端のへ
おりふへ　忌　ねぐふへ　乳
たぐふへ　雀　はよふへ　迷
そふへ　拂　たぐふへ　遠
ちふへ　遠　たそふへ　低
いそふへ　祝　こふへ　唱
あふへ　相　なふへ　叶
そふへ　赦　ひふへ　指
きふへ　笑給　えふへ　酔
そふへ　這　もぐふへ　随
やふへ　森　はろふへ　絽
右乃ゐと涂る

いそふへ　祝　こふへ　唱　ふへ　添　さそふへ　傚　川
あふへ　相　なふへ　叶　ふへ　狂　ふやまふへ　致
そふへ　赦　ひふへ　指　ふへ　浄　むふへ　向
きふへ　笑給　えふへ　酔　ぬぐふへ　味　はふへ　估
そふへ　這　もぐふへ　随　ふへ　映　ふふへ　占
やふへ　森　はろふへ　絽　きふへ　嫌　やふへ　岩
右乃ゐと涂る

一奥ゆかしと下に書事

ゆかし　声すること　未　小ゆかし　熟へいること　家

うちもんわざ　まもんわざ　庵うちもんわざ　右ふ乗　右ふ乗　右ふ乗

わたくしのゆかく事あまた有ずきりや

一端乃いを下に書事　此事端のいを下にかくし

おいのおさめひらいないたいるいくさいく

一井ゆみを書事　なまさにかよふ呂一ホよむい申れる外へしたとへいふれを井ゆるまとも読ま

まよへ　矢　うまよへ　差　まよへ　丈　うまよへ　熟

うまよへ　俗　まるへ　踏　まよへ　与　そのよへ　調

さうふへ　栄　うぬへ　植　をぬへ　表　をよへ　加

此外あまた有べしひふへわよかよふ五まれ故よ端のへをる山ずとうふまても申ずえや奥のゆやなといふまぢき

又ふへよかよふとも志へ白ぬ志へかゐて謙兼ゆとい端のへるうと志るべし

けるよう列て
申れるとそ

くるる　たまーる　ムる　志るもそ
うるかうり　法るよ　まとる　まちるて　そるる
よる　きる　いも野　ふるやまう　此下るへし
一うれ字下に書事　下れひきのまうにかれけるいうれ字
そう備　ろし　法師　せうか　焼香　ねうだう女房
うなう同通　せうく小こぶたう堂塔　こうまう長隆
まう汁備　ろし料帝

右如くむ字より下とうと読い大略うち字ぬへし
訓う後時いうとよ毎う字いふれ字とうと読る
へしたゞて後字いうちうのこうるへし
一む乃字とうれ名よ後事　口とつゞて後字いうちうる乃
むもれ木　むかしおて　むへ山風
むめ　むま　うこんれむまそ
一をぬる文字いよとそ
蘭(ラン)とらよ　雑(ナン)波とるにを

丹波をたよる　芝蘭（シラン）を志すをよろこぶ一曲たまわるいたゞきぬ
一まんだらん　まつしまと云ふ
右もおかしこまるの俤名れ初一字なりいろよ
もてまをもてなす中乃ねの奥のひやなどれもひ乃外
うのまる事もなるようとくく考へて唯
俤名遣ひ挙一陽已前余り進えもうとくし

増續山井四季之詞上

春　青陽　青帝　陽春　蒼天　東君　詔光

正月　むつき　上陽　孟春　大簇（タイソウ）　畝月（ウヅキ）（周礼）夏正（カセイ）　太帝月（仏云）

つゞ日ともいふ　それを畧（リャク）して　むつ日ともいふ　それを畧して　む日といふ　立春の後十五日　氷（ヒョウ）の解（トク）るゝ初（ショ）　黄鶯（コウオウ）斗柄（トヘイ）寅（トラ）の方をさす　なよ竹の風　雪間の草　など皆此月の候也　夏正といふは　十二律の大簇（タイソウ）に当る故也　次当（ツギアタ）る大簇（タイソウ）とも云　○元日　きさらぎ　更（カヘ）つめ　こゝのつぎのおもてなり　その

さしめ あらたむのこと あらたむの文
新一きま 上日 年頭 賀旦 聖節 改旦 歳旦 年の
さしめけのさしめ月の朔日の朔あれいこれのあーことといふなり
了畢の朔月の朔日のさしめあれいこれのあーことといふなり

○四方拝（シハウハイ） 畢をさゝめ付かしづきぐぐ属星をとなへ天地四方の山陵をおし
なて年災を払ひ宝祚（ホウソ）を祈ることを毎年正月元日に行ふ 公事
根源 初次第に重 畢をさゝめ年中行事の三合り
南をの畢本命星をさゝめ七廻つゝ陰陽師祭ることを公ぐ
いまをゝの世俗畢備として冬

○歯固（カタメ） 歯朶（ハヂ）餅 大根いそは少づゝ歯
さめといひてをちぬくにむゝ歯固いよ
い歳とんで命とゝの故をとゝ畢固いよ

ひくさむる公こと 生家の餅 畢をいはひて陰陽
納言枕草紙 ゆゝしきの事をいよ
冬ふゆーてはひさめると云ゝ一名をいよ
よありつゐいさぎをおやこと 世俗問答に云ゝ
みをゝさめ 畢をまた根をおち雪るる
をなゝ一名をかゝ 竹とゝよう

○薬玉（クスリダマ） ゝをうよ 屠蘇（トソ） 白散（ビヤクサン） 度嶂（ヒヤウ）散 天皇
居箱をさゝ 畢をさゝめて集まあり

らひてのゝめて 畢てゐうよ
こいたさゝの事を女まて 仗うと年中行事の
比俗俚のごと 吐法華の事 畢
一献 屠蘇 二献 白散 三献 度嶂散 事文

○椒柏酒（セウハクシユ） 事文

○椒酒（セウシユ） 畢は

○椒觴（セウシヤウ） 書言 これを
えけ 用るよ

一字文選要あり
山林乃さけるり ○朝賀 郡ノ朝賀 慶賀 慶賀 付小郡絆
群臣 天子を祝し奉る事と各慶賀慶賀を述べ
郡絆の郡を異にする故よりて年中行事の合よ付り郡ノ朝ノ百長
もくくねをといふ 小郡ノ
て数ふべくと公の根源上有 ○ 元日節會 元日節會 志岡慶 七曜
機 脱赤 國栖奏 笛 七曜 曜陰陽暦 氷ノ
曜をもってするよりつひのことをいふ
る 氷の厚さ尺をこゆれば慶賀して年穀よ
をそなわるとも脱赤の笛 氷ノ
りてまわりしをむりいに節会あるとや
法司奏とて元日節会のつるてまあるとう
ひ笛を吹事も此節会よ付り 豊明 天皇吉野宮よりまの附
玉柄人よりて一献まわをそなわるこのうひしをはを常に来

郡ノ云をおびとや
公事根源にみへたり ○ 院 神 一日院宮のくら次の法ホ
次のね礼 そなれある事とや
拾芥ニ在 ○ 祇園 祇園 ギヲン
天王祇園のお殿まて松の本社をうつ
きまて大ぶく新志の為ま用るまこと
徳のうを 俚 ○ 元方棚 俚 エ ハウ
○ 畏 沙門乃ぐく経 俚 ヒ シヤ
めでいそひおりけよ ○ 門の神棚 俚 左右家の妻戸ホ柱をうまくて神を
る事也 ○ 門松 そて松 俚 内侍よ胡 かさりまつ 竹は清き籠 カホキ 籃

あるなど世俗の問答よわいふ年をちぎり竹いく万世をかぎるおもひ
年始の祝ひ事ふるよりー条禅閤(ゼンカウ)の時代作をけくさ也

○かさうふを 俚 かさうふ 簑笠ニアリ土佐日記ふこのうた
あるくろなえと作るこれこをくてみとくをかりうかぎりなくていまるまなる多くる

○かま鯛(エビ) 俚 ○伊勢海老 ○若水 俚 ひく
井華水(セイクハスイ)ふ水桶 俚 をま御生気のうさ井を酌(テン)してあたゝ化
てくよりよりて立ちの日主水司(モンドノツカサ)内裏よをまい那智(ナカ)綱よ
て是をきりめ年中の邪気(ジヤキ)を除くといふ本の作ることと
年中行事ふの合よふくうふ是をつゝ井ひくともいふこ
ふのちめよくめぐふ水と云ふや又世俗問答よえわさ
ちも此日井華水とてふをうる水を呑ふ作りやと作り

是をふの事ふ立家よい年男とふのえりのよふよ井のふを
ふしをふ水とてま水かとゝめぬめて用作りー作法どう
ちちうせていふ立ふの事ふ当ふ年ふ匂によりて作ふ事を定作る
ーこれふ徳法連ふのふ水ふえりとくと俚作ふいふ用ふ

○わなぶく 俚 元日よ大根よ大福よいひちる
雑煮(ザフニ)よ 俚 くんをいふ

餅(モチ) 俚 三ケ日につきふる餅を
雑煮なとに用ふる ○ 若(ワカ)
いものふこはむちびこぶはひらき豆(ゴバウ)はふとゞーはあのちのはこかふけく

かざ箸 俚 ○ 蓬萊(ホウライ)菓
(ふのなぶをいふり)おばふこうどのふ因つてー作法ふ
かち栗 ふ 梔(くちなし)び(うめおく
たちびなかさ 俚 ざいく柚(ユ)ふ 柑(カウ)よ
```
```

○たもと 俗生十ばの嵐を云り ○をしあめ 土たは記は元日に用るすゞ
江次第も元日押鮎(アレアユ)拉(ヒシ)といてる年魚とてそれをめは用ゐるいをこ ○年男 俗 ○庭かまど ○ふくわら 俗 ○ゆづりは 俗 年始の折る玉手は万葉二玉きるると云是こ(袖中抄)これ荳蔻(クハウヅ)帝の亡ー治つる崔尤(モンコウ)ら眠の人々をおそらくといふ(袖中抄)(世諺問答) ○ゑびす講 俗 さるちやうもはやをねぼ(ヨ)は胡冕(エビス)の子ロほをとらんとするのかとちよーてとと云(世諺問答) ○破魔弓 俗 ○破魔矢 ロもいとむまじうるむりの引弓の声祢びうや ○をさめ ○弓始 ロ ○的 ロ ○射そめ(ヒメ)ロ ○きそめ ロはさぬきそもるいをひく三ケはのうち吉は射ひてもるこあり凶はよい談(キヨ)妬とて舟ともかうてのうめ仕るまをいふ ○三別をもち連平(レヒラ)の ロ俗作 ○叙(レキ)氣(キ) ○初鳥 えもの初鳥 ○初夢 立夫の乃至乃至 ○去年(ゾ)今年 るとしよひのまき ○暦ひき ○俗筆

試筆 書そめ俗吉書ニ
試毫は

○千壽万歳 万年米毫俗ニ
ひとつとせ云々餘堵ニアリ ○松ヶ枝 俗ニ
是ヲさいらくにいれて来おく ○多逗は ○松ヶ
○、いわつむ俗 ○いはふる俗は正月の麻
起をいふ ○せち振舞
○みそ祝は ○年ぢ文書は ○桃符 桃板 桃梗 仙木 ヲ
神荼鬱壘 ニいそうこれあるべし 桃のまれなるに神荼鬱壘
の二神のうちを法よりきて えをよく門
ぢうなを桃符とも桃梗とも桃板仙木ともいふ事文 ○畫鶏貼戸 ニ 葦索 ヲも
かく国よあり

あり 諸を門戸のうへをさうくよ
いふ ぢ ときめい百邪をさる由来時記よあり ○如願 ジョゲン をろうにある高人清湖
去よめ 郭こんを 是くおき出ようとて高人おひうちけ 当い 嚢壊 の中ふけ 入てそ好
足くもなぬを放よなく えほおかて 纏よく形をうけて 妻妾 の中よを
けて 令如 意とゐ事文 ○莊厥 アレハイ 次を 灰 の ほあ の 紫乃
事とせり事文 ○莊次を 灰を律 リツ の 管 ハシ よこて
をけい 妻 の気 動 ける 時 を度
をのつうろをとこと事文 ○春盤生菜 シュンバンセイサイ もろこの李 リカウ 野 ノ
とゐよ人大根 荷 ハツカ
なとを 菜盤 サイハン とて立妻乃ほあひをくれうろうる
ハとありて 春餅生菜 を妻妾と号をいふ事文 ○春燕 シュンエン
をいそぐ 縁遠 エンエン ともこれそもろこれ燕 ツバメ をほうう
いろうて立妻の日いそくとく 案付記

○初子日　子日のわらび　小松ひく　子日の雲　子の日の
るに私む等と云萠（モエ）と云なるべし　若菜（ワカナ）　若い万葉集に家おんの
日こがひする事をも記そもと小松をえらべて正月初る事と袖中抄（シヤウ）にあり　○若
菜　初てうなヒらさをづゝ（ごさまう）すべきうすべきこゞ芹（セリ）　なづな
薺（ナヅナ）　御形（ゴギヤウ）　はこべ　仏の座（ホトケノザ）　菘（スズナ）　蘿蔔（スヾシロ）　仏の座　菘（スズナ）　蘿蔔（スヾシロ）
これを七日にむりいる（俗言）　菜を上のまゐに門松家毎に門松
日ようう様（ヤウ）に申してうち至るべし十二種供（ク）ると云事也
あるし由云事相原よりきたる事也　○七草　七草
いと家七日に祝（イハ）うそこるがきをいふひたうと六日晩より七草
やもとてわらべを登（ノボ）るのをて唐（タウ）むものうとは本乃うとやとよふ事を
うちうや
しきたり　○初寅（ハツトラ）の日　俗○よど物（モノ）うし　俗上の家乃は稲（イネ）るよ
りとの事乃わさまれいぞこよ火事（ヒゴト）ふ
事をふごおろ〳〵といふて二夜の宮よりもやうて
○若宮寺天狗宴（ワカミヤデラテングサカモリ）　俗二日弦指（ツルサシ）　行（ギヤウ）ふ
をこゝ此事ともをふ尽すてみきうて二事ゝ事よゆひておりやけたて
まうを法社とよう公事相原よりをふ氏乃俗よい卯つちとあり卯
社と同し事ゝ事中の名尼（アクキ）をこゝ追ゝ条ふより内書よいとある由と
三光院乃説こいとの世よかゞ義（ギ）より卯社とて左京（サキヤウ）ぞてうる
い二尺おうりの白くけつうるまよひ（ヒ）ケの名（ナ）ゝをとひてクリカ
ラ彫（ホリ）のうちよりくまるねゝ俗（ゾク）の納（ナフ）を松葉紙よ卯社のかうしと
り事を俗　○二宮大餐（ニクウンダイキヤウ）　二日ゝ
王（キミ）ふ
まうく事あり　○朝覲行幸（テウキンノギヤウカウ）　二日ゝ
公事相原　皇并に母后の文（ブミ）にて幸（ミユキ）

ら事あり公事根源
雅號の字礼記よりあり ○ 臨時客 二日くらい招改開白宴ま
をまねきてあそびまた事のあるとき客のあるとき也年中行事 ○ 三ケ日 ○ こころの
さいぐうとより 朱公云 ○ 千癒 万病等 (延喜式) えりの
野也乃人も筋拘 ○ 連雀 三ほんあり ○ たらやく
御茶ほいこゝろきよめてたて茶三
ほうそくをまもり 紀頻并に法耳のごとくにしらべ
頻茶 ○ 履端之慶 えりて人を賀
茶 ○ 改事 ○ 白馬節會
する行あり
書言故事 ○ 西儀新之慶 是を正旦より書をかく人を賀
○ 叙位 五日或六日法住のもの
七日あをむまのせち御弓の奏白るをあをむまを引て
るゝいとて正月ちあをむまを入れい年中の邪気を去といふ本文を
をねよ七ぜひきて天子の出後わ
たてまつる法弓の奏と云ふあり
ゝ弓も七尺五寸ある故よこれを
たゝ〳〵といふやう云事根源 ○ 七日 正月 世俗いわの世よいふ
のあつものを用ひ仕ゝ荊楚歳時記にも正月七日
俗七種の菜を羹にして食ふべき由あり ○ 人日 七日
○ 霊辰 書云故事 ○ 人を帳 事文正月一日を鶏と
を貼 二日を狗三日を猪四日

い羊五日い牛六日い馬七日を人日とつゝしめり一日に霧を門にまくがよく久しきも麿よい人と帳よ貼をえし ○菜摘河神事 仍七日吉野にありて ○御斎会 大極殿にて七日寂滅王経を ○春 言院御修法 ハ日より壱人宛清涼殿にて七日金剛寿命経をよむ七日をくみかえるく修をとるなり七日の御修法事ゝ春正後い禁中にて行ふ事ゝ皆七日ゝ也 ○女叙位 八日女の位階を叙をとるなり皆七日ゝ也 ○太元帥法 八日より御修法をとゝや三ゝい天子のために行ふ公事

といふ 五位のくらゐをのぶるをいふ 紀事に季冬と同じ名をおくるともいへり 解文 解由状をいふ 兼明門 女王禄の女ノ字ヨヨミズ 陸奥の國 鹿海の北狄の糸りの女のけ布に出おりめて神おまよ玉にこを申すくらゐをびのくらゐに叙きてするいちこを常の男と現しくるを事とゝやゝ ○夷 夷ハ狄の名なり ○縣召の除目 十日より十三日まてこゝのと云くわがい田舎の人をめして任官をさづくるなり ○御斎会

廿七日 内論義 十四日御祝言の祝詞して南都にてをこなひ
同志講頭と御おさめて論義もれい内
論義とうや ○男踏歌 十四日の夜の事なり
多しといふいかゞのわざを誤るく論義の節会ともいふ世俗
八十九のおしわざ小さごてれどもいふ生中
の男女のまよくくをめしたゞして事始の祝詞をさく
りて森をおりをとせらを仕ふ踏哥といふやわ
らかい和哥のをうたひあるひ詩をうたひ琴笛
抱琵琶よい中音をつくる生をかげの方
綿の壱をつくる生をとかげの方
と結ぶる者をして踏哥の声調をとゝのへ
但十五
歌あり ○十四日年越 世俗 ○繰曳 仙大徳をり合て
勝負して仕て吉

廿五日を知こ ○三毬打 左義長 爆竹 みそんと世話吉書あるひ
云ふ ○てうちする鉾おを神前にそなへ
ふよし 但紙または成就の池よりとゝやうく
しといふ ○この世は二ケ日のかまりの杜仲志めるのそなとあり
めて扇とうけ常ケ祭とうけてそんとやおそんとをもて仕始
つゞく 望乃祝よつまていまく錬丈とふ事を習してさ
ちやうとふよやと師祝よい仕ふみた義もとふ字よつき
ての祝を批抵よあり 爆竹 いこをろこに山膝 といふ物人を打
しるやうをどをもろさして仕るをえはの不ふ事文数
畜よいぞさり紙古キ心よいナみる乃噺ケ仕てをこうきり賀
義ふは十五日の夕内裏よい十八日ちり

○上元日 十五日の事こもろこまいと
灯楼 よび灯楼をろろ事あり ○御薪 十五日
えい

百度ことく〳〵敷(タキ)をたてまつりて
玄内蒭(ヒロ)まねさめらる事とく〳〵す。○かゆの本(ハヒ)は○名
づえ ちいさ紀志(キシ)をよて女の腰(コシ)をうたゝ
うたふる者い男まをきといつて枕を紙よい名の本
とあり狭衣(サゴロモ)よい名枕といつてあづきのさよ
まづりけとよおよてくとをかまる事也るり。○小豆粥(アヅキカユ)
いそよ 仏はわづきう名をいてうを物をまるい
年中の祝ひを除くといつて〳〵事。○平岡
乃御粥(ヘノオンカユ) 仏はわ阿内玉平宮の神おまよる名を
たまて年中の四名の名遠と相まもとこ。○師子
頭(カシラ)の神事 仏十二月廿日伊勢國山田よわる事〳〵常
十五日十二月の大さい松をふる事なども。○賭弓(ノリユミ)
十八日是い天子弓場殿(ユバドノ)にまして弓をいろ後さる事〳〵左右(サウコン)
弥(エ)たち云弥四尊の舎人(トネリ)ともの射(イ)仕(ツカ)うまは罰(バツ)
をとこるひうちれさまよい事(コト)呆てのち大お討手よ貧(カリ)とたまよまをくまわるでとよ
れ来うま除とふふざをみ事(ツヒ)ふ事(コト)ふ名ふ名ふ名

廿日仁寿殿にて行る文人歌を作ると
俗て古今とて漢ざる事 ○外記の政始（ゲキノマツリゴトハジメ）吉田清枝（キヨエ）俗十九日
○御忌（ギョキ）俗北五日法終上人の忌月にて十九日
より七日念仏思惟をいとなむ ○福壽
草（フジュソウ）俗えぞ草ともいふ えぞに花咲とぞ ○東風（こち）ふく ○氷とく
氷なる 氷のひま ○みてまくる俗云氷と
事和とよもまく ○魚氷
よのそる 月令五日乃候 ○雪ふくむ雪月のこる雪
雪のさえ月 雪の志づく 雪ふる俗雪ふる
雪のより 負徳説あり 俗雪

○水ぬるむ ○氷の節（スイ）

正月の中し ○鮭（カヤウソイヲ）魚を祭（マツル）月令 ○本乃目 ○下もえ 或説二月と
いふ 但月令は草木萠（キザシ）動（ウゴク）雨水の節の末也 ○くたち 俗草名 蠡海集二
水の節より一候ごとにわるひい菜乃名三月といふ 十四番の花の中にあり
ふきのとうと於きこと ○萱草
俗 ○水いり菜 は名菜は根白 ○若草 新草 初く生 俗
いつり苅るの 或二月ともいふ
ふきの ○よめがな ○ふき紀ノ ○ふき杜ともめ ノ
たらの ○梅 花梅 実梅 編笠梅 行平梅 住吉梅 好文木
営南梅うぐひすの初音を同しと読しより世俗に在 ○柳 白ひ草 義経 ○雪柳（カザミ） 白梅
わをやさわをやなぎ 川柳 風
花草 川そひ柳 川そひ草 義経

玉柳 春之事柳門の柳 関路の柳 同之事柳花 うぶ柳 はこ柳 はき柳 枝柳 ○ 鶯 匂ひ 舎衣之事 理よむ 多は詩 おもと多は学の琴 は学笛 松双紙 よあり 仙はなへとの笛よつゝ吹あし 学の事 よあり 黄鸝 黄鳥 詩 ○ 佐保姫 三月よ 辰ろ ○ 水ぬるむ ○ おそ ○ 雪 三月よ 辰ろ ○ 雪てく 仏 ○ 紙 ○ 万歳 バンス ○ 楽 ラク ○ 春 シュン ○ 霞 リウ ○ 啼 テイ ○ 梅が香 ○ 大荒 ○ 子日 ○ 衣 梅の花 学衣 学袖 柳のきぬ ○ 松の花 ○ 若菜 ○ みどり ○ 霞 三月よ ろる 八重霞 霞の衣 霞のあと 霞の笛 霞る 一かたよ 霞よ 雪法ひても 霞よ 雪恒云霞の衣 衣 霞よ 雪 霞の網よ 仙 霞の海 そびき お帰 辺 霞 ○ 霞む 霞 霞のあと

二月 きさらぎ 初又月(ふたつき)(ふたつき)(ふたつき)

仏を祀る所也
うて行ふ ○廿七日の能 仏南郊よりの
ひる事あり朝日よりよりやはり
入路父として此経を説き多
日まで小乗経(ショウジョウキョウ)釈迦(シャカ)堂(ドウ)まで此経を説(トキ)
し悦(ヨロコ)ばれなよ事釈迦(シャカ)会式仏といふ
これより帰上人をしめらるとい
涅槃像仏涅槃会仏
書乃ふて仏 ○嵯峨(サガ)義桂炬(ギケイキョ)仏十
楽会(ガクエ)日 於茨 ○積塔(セキトウ)十六日或石塔とかく
弟二月の 坐次のこと
中し ○彼岸(ヒガン)夜 ○社日(シャニチ)其谷のおなをき戊日
と或立春のまえ五戊日と

是あるこれ五穀の神をまつる日と書云
古事記はじめ氏社よりつくるといふ
こころをきを治すると云
ゆへ也 ○社翁(シャオウ)面 社の神 舊水(キウスイ)を含せさるゆ
社前の面とよこし指要録よあり社へ祀りたい必面よりり号を
て共工氏のこ也水土と平げつる
とせり夏(カ)よい柏(ヒノキ)殿よい柏周の
玉者五色の云を封して社とし ○宗寺寂勝(サイジャクショウエ)会 十九
五年よりよ始こと於茨 ○天王寺聖霊
舎(エ) 北二日至仏忌日まて
そ法事あり彼岸仏
満天并の法忌日まて天王寺
八講あり菱屋氏の人てをこなふ ○小野の忌日(オノノシンキ) 北五日天
季(キノエ)よ読経(ドクキョウ)或三月中宮まて

大叔若行陰公ヲ○二日灸仏○冂出かりくの二八月お彼わる事をめの季をそめるりのちとよ字そくて秋るり彼岑仏時正当も炎之後の枝葉い秋之初卒天の灵不花よ樹あり二日よ花て七日七夜にて葉秋八月よ実ある林花を帝釈ホ名集りて七日乃花世界の名人忘人の名ともるせりなよ山林葉七日のあと若葉を時ずるといて元祐の記よき○ムちあえ元を生ス仏○鴬メカクセーく鳩ハトと令○純尾ツキヲ乃鴬白毛の鴬ス恒云芳政教を鴬の毛と雲のきこもく先とて白きお出て結久くう鴬已ガ毛を雪とえて山へ因るムるうしめんとてく○鳥の巣ス多、古巣○鳥の粥○雑子キビス野

嫩懦の名后の諱ナを絀といて山諱をさきてを世よい雉を非鶏とりよとより物と鴬り山胡鴬すぐこさんいまへ鴬云芳ホ雉のおく不をを吟多物とも吟きへ多とも彩さうかりたよこすこさんとい陀のおくぬゆうよことさ唐ホは仮る日巣○鳧多鳧よ多は或ハ別云○帰る鴈乃仏乃よかさこをむさひてもをり○雲雀ヒバリ吹て取る事しひさうりあり仏○うそ俳琴ひく○こ鴿多は○すめ子ロ栄○蝶胡蝶英蝶俳蝶くはあけものてふは○蜂の巣仏○蚯アブ俳○蛙くろ仏

ひきぐるふ俗 くるま井桂 ○地虫出ふ俗 ○いとゆふ 糸わそふ 糸 ○猫さかり俗猫の妻恋 ○きのこ俗 ○うげろのめ るは ○初鮒 ナヽは鮒腹 ○飯蛸 イヰダコ ○志ぢみ ○田ゟ ○きりぎりす ○初稲ひろは 月今よ始電 ○八重の梅 コウバイ紅梅 城中梅俗 庭前梅 梅梅 ○英梅 リウバイ俗 ○紀を結 ○初瓜 ○初桜 ○枝垂桜 俗くさぐり桜 ちごさくら ○糸桜 ○玉楼 ちくさ玉楼 二階桜 つくく桜谷間のと読り 負俗

云桜い就しを ひてい妻 俗今 花とあくても花のむわらいまでし ○雉 聖山と雉 ○やまのすき ○そぐろの茂 ○萩の雉糸 ○畑 ○田をさく 田を 畑をこす ○茵 代 ○ミナシチ ○ウリ 矢俵云苗代 なぬさるとてもある事 ○粳まく ○麻 まく ○うど俗 ○ふきのとう ○ほくくしは笋つまる古の筆 ○秋菜 ○防風 ○さゝみさゞ ○油中お ○茎くくづき ○茎わ 茎 ○菊乃若葉 ○蕨 ○蕨子蕨さき 萩のりそ 蕨俗厥

多仏寺磨（朗詠）
堀川百首ニアリ　○角ぐむ芦（アシ）　芦は葭（ヨシ）ノ
○茅（アサミ）は花茅ノ　○苣（チサ）　千井口川ちしゃノ
うち苣は葉ノ蚫（ヒシ）ノ集まるよふ葉のれいとうりの夏のれい言ニよ
こたゆり　紙（エン）　紙書ノいとびのかみ
及ハおうふ
ほとゝぎす

三月　弥生（やよひ）　陰月　桜月　季冬中旬事文）浩洗
やおひ月とよるもよろ（ヨロ）ぶ（ブ）ともよろ（ヨロ）ぶ（ブ）ともいふ　萌（モエ）出ずる草の弥月弥生（やよひ）
ゆへ中旬よりの書俳書ニ冬ハ月花ともいふ
よし〳〵　上巳　三月上の巳乃日水辺にて禊祓（ミソギハラヒ）して厄病を除
のち只三月三日を用て已のひをハ用ゐず　○麻（アサ）の吉稜（キビ）　ハ
朗詠ニ源紀周年恩観文ニ云ふ
光源氏物語ニ三月一日巳乃日陰陽師（オンミヤウジ）乃
おふきてみそぎ（ミソギ）よりまよくさ（ヨクサ）をつくりてまうせ（マウセ）事をも
故郷ニ
まゐり　○曲水乃宴（ゴクスイノエン）　盃（サカヅキ）をながれ
やりけるむかいなどにおろ
名所ニ
ながれ盃をとりて酒をのむ
と云事を歌よみ事ありしよふ

松原よ　えふう○桃花の節　三日桃の花供草餅口ふえ
桃花を酒にひたしてのめば百病を除き顔色を本草
ありとかや和名抄いつう事文類聚に桃花生玉洞柳葉暗
金塵といふ詩句と上巳のそうじ生きうそ
ひ柳の枝をとりけがらや等併いむう周の遏密淫乱して歌
悲哭しぬ也もゝある人草餅を遏密といふを味
をめでく宗廟よそまるへしといふをうけごと改
うて世俗うけうけ十節録よこ
月三日にある故実に成といふ説あり
きいつをする事なれい雛ありて玉へきをといふ但雨の明
皇信受の節よ開敷をるうそ
かゝ人壱万人を玉てそを飼せる
清白香しもゝ人をと数よる山成りや
天保元年三月四日より歌舞十番あり
収むる定めら仮らも事を拵てとゝるうへ
るう故もおくねばうちやりせていれ
分の事ひをひる事の由仮当いうよかき
しらひのいさ山乃俗よ仕をてゝの
新続大観は集りをゞくしやとて
きをゝむ　唐ノ俗上巳三士女逛戯スルヲ云也又三月三日上巳ニ当ル
履とゝ事　盧公範往
人日二男人逛
戯ル事云く　○御灯をいれ
云き男女ゝ火とゝもしてふ夜ゝ供をられ
心むきに法生を春て三夜はおありなどゝ仏事祖師をみくうり
師ちの家勝云　七日はち天気ゝ
言物五穀を

○石清水祭 中午日みなこれを先中の辰の日試楽を
仁寿殿の下より出おはつる事あり 陣人竹杖者のりて竹杖をつゞ
朱をおわせなどすると云 南はよいたる大臣以下かげの装束
より三献の五献の肴をもりかけの事あり 笏を手のわたつゝ
延治の事を八捷文よ初らせ事を行ふ 供奉の人々
そめつゝ生けり事と 御神楽 冬もうら百五日 清涼の節のま
もなく神楽などやう事 ○寒食 一二日と云ふ或ハ百四日或ハ百六日
いつゝもいろうに炊ま推といふ 火を改ふと云 鄭玄帝ハ小方ニ老がのかよいさ物ハ
て宮ニ食とはるなり 周挙井州の刺史と被ける時を出火を去
て民の家とそこなふまじ 朔ごとに民の賢なのを二にあつじて井

列の民よ初て国会ばしそうる
ほを宮ニ食ふは焼火と改ふ事と
宮ニ食よ用ふ事 ○粟中記よあり ○東乃餺飥 ○青精飯
津文青飯を乞し宮ニ食よ初
まくて出ありふれをくゝ陽乳とたゝくゝ ○春の粥
乾石飢といつゝを ○鞦韆 乃戯
をゝ飢飯をゝし ○半仙のたハふ色も宮ニ食
よ色ゝ縄を木れ
ゝ架を立て土女ニ上て坐ニ立てこゝごゝてわそふ事
あり唐の天宝年中に三女宮ニ食に出鞦韆のたふ事をゝ笑ひ
ものしこゝを帝ま仙の戯とゝゝ ○清明乃節 三月の節
まへると大宝生事りあり
○楡柳の火 楡柳の火とよ火焼を改ふると清明のせつ
宮ニ食よ火とゝりて帝より臣ほよゝ

るるこゝろうのさざえ
書云故事みとれ出一事こ○住吉乃塩干仮三日○石山祭仮同日
の海よ視石を仮同日にるこ○一栄(セウレ)る冬は五日こゝろ
仮同日○泉涌(ユジ)ち寺開山忌
は八日○水尾祭は九日○言雄(タカヲ)法(ホッケエ)苑と云十日仮○やとるひ
苑は日言葛の法苑をやとるにまてよとこつきとかく拍(ヤ)と野趣
を仮あり有よ言雄山言成りるはよめやとるひ苑と雑(ゾウ)う
けりると文本よる○吉野の会式仮十一日○礼拝講仮十二三日盛山
行○祇園一切経舎十五日於仮十六日○比良祭仮十五日○壬生
の念仏仮十四日より北野の左近桜言る猿楠を焔ア○勧学
舎(エ)十五日庚保年中に大内記菜保(ヤスタカ)泉涌犯言結の後のつことをろねき
人とて文乃先生の学生をもくめて三月九日のすみをれお
こるひとぐめ(ぐ)れ仕り会(エ)拠(ガク)朱そる一叔山月正(ショウ)寺と紀斉名
の仏史ふも云こ一朗逆勧学院い三除の小壬生のあいまの在
所森を法こ菱来氏の学生おやるびしてあるり五世よ四条大宮のあるようる○嵯峨(サガ)義の大念
仏十五日犯云あり○千本念仏仮云き仏ち○浅茅
条(ジョウ)十八日仮○御身拭(ミノゴヒ)十九日堂係の尺迦の宛供(ク)仕一日仏法大師入定の日のれそ
言尾神隊ち仁和ちなと女の詣ふもろよし○稲荷(イナリ)の

の御出 中ノ午ノ日あり吉抜
ある社あり
○田嵐(テンソ)にて靭(ウツラ)となる
節 三月中ノ○薄生(ウキジサヨヒ)をむ
日令穀雨の
乃元候あり○永(ナガキ)き日
○遅(ヨソ)き日○夜色(ナツチカキ)○
ゆく春の殿(シンガリ)春の名残(なごり)
春を惜む 春の暮(シンガリ) 三月盡(ミナヅキ)
春立(たち)て 三十日○時鳥(ホトトギス)の巣○よ

世ゝも祇園にもあり）西山桜（西山よりあり）法輪寺（同寺にも名木あり）
大きさ一ぱいせさうにきりゝやつは
堀が岡は普賢象は左山府君は
ゝてはまりさうにはあよ紀桜は
俗大さうに後取乃うとゝ俗云ゝや
吉野草は野ざ草は
にあり左山桜も左桜もを山よ咲
きつるい恐きとゝ桜内桜おゝ亦の
よる亦ゝ桜狩い桜を乃あゝ津
きりやつ堀が岡ゝきひ左山ぶん法輪寺
句は花とう桜とう句ひなど
説伝しゝ左桜をなれてさく

○花の錦　○笠の雲　○花吹雪　○毛むくじ

○花乃波　○花の波　みる花をそゝる津ゝを申
あふ車
あり。○笠の露　花よ
い。○笠乃笑（エミ）　花の梢　もの句ひ（香を）
の梢　俗花の
○花園　花畠　俗花の名　これゝいみるゝれあるふをりよく
花のえんぐせ　俗花のそぶ〳〵花公
人のうゝよゝといひる酒あり　○心乃花　負法云人の公も卖
公の花い正花ゝ酒の花い只無吾よ
正花よあゝ法ゝ酒の花ゝ
○花衣　花の衣　笠の袂　花の袖　花の
止をりよあゝ

をうこ 花桶 仰 花筒は ○花車 花笠 花筏 仰 花
筌(カゴ)繩(ナハ)こゝろ 花を入る筌なり
の如き 雛(ヒナ)の 筌(カゴ)ようの 花うつぎ 仰 花うつぎ仰 花
かきねなどこの中より花うつぎ白き花咲出るをとりてかざるなり
ざるをとりてかざるなり ○花ぐるま 仰 ○花ぐもり
正月よめへきたりや ○花むしろは ○花雪 仰 花雪(ユキ)仰
をうすとよめり 天竺(テンジク)渡来 花いくさ 花雪(ハナユキ)仰
よりこれを花いくさと云習せり ○花乃宴(エン) 花
○花遊 花鐘(ハナガツミ) 仰 花の萼(ガク)をも花遊と云 ○花
花の名をいろ〳〵 正月 ○花乃露 ○花の
名と負惜(オシ)いふ ○花乃露 ○花の都 ○花の

躍(オトリ) 仰 花こてをおどるがごとくなれば云と所設之 ○花
笠(カサ)は ○花乃孫(ミコ) 仰 ○花守(モリ) ○梨花(ナシノハナ) 山もゝの花 彩の
の浦梨名所の梨花なり ○花ぐもり ○花乃あるじ
○花ぐもり 仰 ○花ぐもし 仰 ○老花(ニガバナ)は ○落
葉(クハウヨウ)ふるし 称ある花 ○幸夷(コブシ)は 仰 ○鄭(ツボ)花(ミ)つゝし 白つゝし
つゝじの名 花てし 仰 雪降つゝし 仰 ○山吹(ヤマブキ) 款冬(クハントウ) 負惜(オシ)ふくめり
のつゝし 仰 笑花の山ぶきの山吹といひ 朝詠(アサヨミ)もよめり
○山吹 款冬 負惜ふくめり 仰 ○木瓜(ボケ)乃花(ミ) 仰
まてい 花やぶき 仰 ○泥丁(デイテウ)花は 仰
の事なり

○木蓮(モクレン)花は○赤南(シャクナン)花は○薏苡(ハウ)の花は○小米(ハゴメ)
乃花は○こでまりは○小梅の花は○庭桜は遅の桜の
ことをいふ○馬酔木(アセヒ)花○杏子(アンズ)の花(俗カラモヽ)○まんこの花は
○檜(ヒキ)花は○柿(カキ)乃たうは○やまとゝぎすは○栗(ナツメ)
の花は○藤萩(ふぢはぎ)ともさうず枝(さうづえだ)ともちづる(俗スミレ)
つるともいふ○芽花(ツバナ)ぬく○拘杞(クコ)(俗)○とくさもめは(ミヽ)
うまお(俗)○新茶は古茶はもちめは茶つことはうき茶は○春菊(キク)は○お

づは菊は○かくら菊は秋きく○馬蘭(リン)は又夜○ゑびくさ(シ)は○金雀花(キンジヤクケ)は○香まん(ウ)は○丁
子草は○眉作(マユツクリ)の花は一説は忍冬(ニンアサミ)○仙茅(ヒリ)萩○菊(キク)
植形(ウヘカヽル)は○いさどもは○三葉芹は○三ぢかたなは○
月菜は○三月大根は○わさつなは一説二月といふ大やう
三月盛(さかり)に用(もち)ゐる○ぜんまいは○春雨三月つゆあめ○やまひ山(京地之北名不尽之山とも書)
○ちゝろ衣(表白黄赤なと枕花詞説くなり)○山吹衣(表もそうちは
黄なり)

○うら山吹 表黄 裏紅 ○ほゝ 表すゝ 裏青

夏 朱明 昊天

四月 卯月 卯の花月（菅玉）得名の月 花おう月 巳日 雨陽之月（菅玉）孟夏 孟夜 中呂 初更 余月 卯月ともいふ

律中呂よりおさまいの中呂をいふ ○更衣（コロモカヘ）一日 ○白重（シラカサネ）更衣のはの衣をかさねるとよし 夏痩（ナツヤセ）俳 ○青簾（アヲスダレ）更衣より後までかく ○あさせ 俳 ○すゞしき日 夏羽織 ○土水司（モントノツカサ）

始供氷（テヅクスヒヲ）一日 巡查式 ○孟夏（ニウカ）の旬（ジユン）一日 扇をつかふ 扇の拝（ハイ）元旦 ○夜の季 ○おもてをあらひ改をきる 元旦 ○二献のほか 扇をつかふ 扇のおとす 夏の季 ○たまる始より冷水 ○愚兄弟 江州つくまの弘神の祭 二献のほか 男の祝ひと猪をいできて女の後る事あり ○筑麻祭（ツクマ）一日或初の午日 ○稲荷祭（イナリ）日日 五穀 秋

弘法大師東ち玄奘の御影を現じて法ちの幹幼をし
こまち建立後祈してかげるを八幡殊ちの神よ倭り降つて
影高を幹幼の御名より速く出現し玉八幡のかと云ふ
去と云ふ〳〵家よあ亜をりそこ
座あり其のち拾ちいこの日救をを
長老が家いまをおびといつるかこ
うご玄影高の山よ殊座の御地をとてあつれ〳〵給こを重容
とた師こつうきびこの
て神楽よくれる松りて玄
猪を走といつ玄法神れち記
卯日 三輪
の事あり○山科祭上己旨○
祭日日今八
酉日○當麻祭上申日
大和こ○平野祭上申日○松尾
○杜本祭日日
の内こ○南
宗祭上酉日の内こ午日勅使あり杜本南宮
近辺九一人乃供あ社よ立云く么事○梅宮祭
日日梅氏
の祖神こ○水屋祭俚南始三日
四日日
四祭四日松あ社大和よあり虔廣ばい大忠神祇四八
凡神こ凡あの旅と除き走の形よ公より祭る○山陵日
ち供俚三月或い○八瀬祭仇辰日ろ
の列刀へのはの祓禊の経冊を式云云
二者よりこて走ると走ら養する
五香水浴佛名法ちに斉をまこ
りて仏よ浴して祝会をあ
の開帳八日山門○山陵祭仇日日天王祭こ
あり童供とり○多賀

祭 仙上巳江戸○江州八幡祭中卯○手安天神祭
七月廿四日麻植の連といふ氏人麻うゑ
糸午日○伊勢神衣祭十四日麻を織て奉れ
るよし 公事○日吉祭中申日山王祭といふ
公事 ○加茂祭中酉祓下賀茂祭
そ法供 ○加茂祭中酉祓下賀茂祭
もる也 ○開白の賀茂祭中申五人の
法服の日といふこゝろなり 公事 ○吉田祭中子日吉田の祭日也
世俗よねひちうといつゝなぶ祭といふ
祭 日日有之祭礼よおそ
するゝ公事有り公事 ○中山
さゝなよゝ云ゝ非祇令に亥の
まつりのみまのもる公事 ○千鳥
○落葉祭 俳中ノ冬部
のまつりとや ○向日明神祭中
祭中巳 ○清水地主祭九日 ○三枝祭 三枝の気を困格より
○當麻寺事 十四日中将姫の忌日
るう御り供 ○土塔會 天ちに
まとよ也 ○日光祭十七日 ○菅
宮祭中午江戸 ○花供 ○神名忌祭を
○梅天 孟夏のそ元といよ
○梅と尓 ○和清の天 文選

にあり源氏ものがたりにても見ゆ ○小満 セウマン 四月の中之 ○麦秋 ムギアキ 月令小満 ○青麦 俚 菜莧菜は ○おち尺菜 北日菜名云菜 牡丹俚 ○苋菜 ヤクヒル 忍びて菜 蜀志菜は苋也 ○苋菜 ヒルナ 御傘にも ○杜若 カキツハタ かみよもる ○苋菜 ヒルナ 二ちぶ菜 菱うり ○かうほね ○おもひぐさ 俚 ういかう ○菱 アカヒシ 菱うり ○たち菱 俚 ○こおにひし ○玉まく菊 ○一八 俚 ○恵や ○蓋 サウビ 藻は ○おうもゝ ○かざく ○茭 ケシ 子のまくは ○石藤 キンキサウ 鴨足草は ○とう苋は ○茶引 草は ○柏ちぼ 負性説文云扶桑可依不存 ○卯花 黒きを卯木 ○椙根卯木 俚 ○若枳 ○茗荷 ○つくゝ菜 ○茂子木 菜 ○夏木立 ヒタチ 新樹 詩経 木の下やみ ○常盤木の落葉 ○桐乃花 俚 ○義人菜 俚 説文あり 救荒本草 ○きぶくも花は ○てまりの花は ○連たまは ○てうもは ○山苣乃苣は ○厚朴の花は ○藪椿は

いさゝをも云りまた又眉俚 子の花のちを化去よりて可実季 但師説いまるり ○椙 カウルイ 樹類の花 俚

○三四ろ(ろ)は花(は)○櫻乃実(こ)は○世のつたなくるしきも
○すの子(俚)○岩梨(ナシ)は○蕗(タデ)は刺抓(ハス)○蓮乃
茎(ミ)は苦抓(ハ)は○郭公(ほとゝぎす)鳴(き)ては四まのたとさ(俚)○かんこ鳥(ゐ)は○渡原雀(きゝ)は
子就(レキ)不(ず)帰(俚)勧農鳥(イノリ)○蝙蝠(カウモリ)俚(ハ)○鹿の袋角(フクロ)は夏至(ゆ)ちうのはしめ(ころ)のまとよいこれるあり
○蚊帳(俚蚊屋(カヤ)のこと)○蚤(ノミ)は○蚋(ブヨ)○蚊遣(ヤリ)は○柱扇虫(ボウフリ)俚(ハ)○蚊
○蚊帳(俚蚊屋のこと)○一夜(ヒトナツ)籠(コモル)○安居(アンご)形心静(ずか)曰安居期此(ゐ)曰
結夏(ゲ)入(ル)俚(ハ)○

五月 さつき 月名也 月たちいる日 仲夏 雑寝 皐月 五月の名也 〇かえで 蛙の足ぞろく 俚一日雞鳴の成るり 〇松本祭 日 俚

〇献 南昌蒲 三日あやめの薬 〇おやめのこと もと夏の落のこと 又叶の花とあるて 回く亦去く 山城の乱望よりたてまつると供をとこ 拾芥 〇五日の節句 云 あやめのうく 天子武士夏よ生れなりて 高云とれこれ 端よ始めよ 午よ馬よ 又月よ午の日こよりて 端午と云 〇菖蒲 あやめ 百節 ひまつせつ 昌蒲の根る 病をいやせ 百節をけきたまふこれをいふく 或ハ菖蒲の中よいき或ハ菖よ一或ハ浴よ入ら 古事記よ 大戦れ月令よ 五月 菖蒲 乱き根 菖蒲刀 菖蒲のり 叢季 叶 書よ 大戦れよ 世俗 つ 五日 追ら 事 ハ 菖蒲 よ 用る 事 ハ 菖蒲 よ 用る 日 なら ゆへ よ 刀 にも ものろ ゆへ おびも 用る 事 ハ 菖蒲 よ 用る 事 ハ 菖蒲 よ 用る 事 ハ 菖蒲 よ

仿るよやまよもよめう部ゐるやさきの
むくりけとよめるも皃をいひ風俗通よい長令端陽
令縄もいひ五兵と辟る娘よ辟兵縄古
いてゝ和学記よい條をとゝるる皃るり○菓日五月五日
をゝゝ
○菓草摘（ツム）競（キヲヒ）竝（カリ）こゝ百
菓摘事也○ちまき
かさゝぢゃ（かさゝのうちゃ）ちまき角黍
粽九ゟ粽高辛氏の妃ゟ五月五日ゟ流ゐ入ら
とゐて人をゐやゝ或人五色の糸ゝて粽をゝて祠ゟ
五色の粽と称る也ゝゐ神人とゐやはゞだともいひ又楚乃
屈原（クツケン）が同（キヤウ）妃ゟ流ゝとゐろいつぶてをいよゝ世諱忌答
よわりいさゐ後拾遺ゟ集をゝとゐ天祖事ゟはなゝゞぢゃとゐ天祖事ゟは
かさゐり粽とかゝりをゝこゝよい角黍九ゟ
粽ゐとのさ説くある由事文類聚ゝ西
○あづくみの甲（タヾ仙）むゝ一統だの東吾國とおをゝんとせゝにゝ統ゟ流ゐ入ゐ説ひゐも訓
を吉例ゝて甲冑と祭ゝ兵奥を調ゝ祓祓とゝて佐と名かの家
古といまゐゝことも
ゝてゝとゞ佐ゝ○艾人（ガイジン）蒲人（フジン）
れよりぎゝゝよゐとゐゝて人をゐゝ
て門戸の上ゟゞ佐ゐと艾人と蒲人ともいつゝ天師ゝて人形ゟお
やめのひげを佐りゐとゝて門戸の上ゟをゝく事ゐり吾ゐも端午ゟ
人形と形の上門のおゐとゝて事也乾ゐ天師と名ゝきて郊の
人の奥ゟあゝゝれも叶ゐよ紙名とかきて愛佐ゐと実て門戸乃
あゟゝてゝく事叶○艾虎（ガイコ）と
よびゐや佐ゝん
ゐどゞし或い色ゝの糸ゝて小虎を佐りよゐきの形ゟつゝ
乾よいゝきゝて邪気を辟ゐ事佐ゝ歳叶記
○鞦韆（シウタン）を討ゐ（イ）高秋園（テキコウタン）水滸白園亦の害申ゝ端午ゟ秋
皃るを佐りて令祭の申ゝ亜て小角ゐゟ

菊とをげて祝ひてこれを合せわかし又水雲と作り白菊と名づけ或は五色をまぜ〳〵人数多きなどのさまざまを作る端午○椎印符五月五日○赤霊符は鬼ごとに赤き紙に書て門戸に貼る○百草をたくは端午の条下に見ゆ○菖蒲湯をわかすも端午の条下に見ゆ○菊の巻

五月五日菊をさくりてゆあみをなすよし○菊の巻に端午の事文結午に多木の葉と百草をたくこと唐史にあり○鴛鴦符

の字を書て門戸に貼て五月五日の午の刻ばかりをされば鴛鴦と飛ひ違ひてやがて死ぬるよしなり荊楚歳時記○菖蒲酒を飲むも端午の事文○競渡○龍舟○水馬競渡といふみなてぶねをいふ名義未詳五月五日に汨羅に沈てうをぬく人をいたみて舟をうかべて争ひ競ひ乃ち粽を水に投ていたむ事よりおこれり○水馬○競渡といふみなてぶねをいふ名義未詳五月五日の五人ぶねの競渡の舟のうろくをやさしくつくりなせる龍頭鷁首をそなへ水馬といふ競渡の五人ぶねを出して舟擢をそろへこれを棹つて水上をはしらかすをいふ○龍舟○競渡とい

放よひとうの日といふてうまを喰ひ
正日なれいをとひとうといふ悪又お
のうりる事あり考ル
虎の渉村とハ云あり ○下地（ゲ）仙世渡岡谷より名古屋の小弓と
乃渉村よりされ りちていんぢとてそるうち
こゐよう〳〵 ○神水（シン スイ）渇を午時ノ雨竹二
競馬（キヲヒ ムマ）五日くらまきとひる東方ゟ左ゟよつびてるく
らくそゐ事あらちとゟ勝負の本のてそ
と決ス ○あやちおびそのお五日五日俗人棟梁とうてお
渉紅李李ありと於放おびそのとーてお
よ必五月五日よおよるもおうとうとそ
種梁をおよふ〳〵ゐ仿うはいま
ちんぶんのおとつとものるう ○藤森祭（カモ）仙五日初うの
祭ルよあり

会人祝五を崇
乃天五と祝う ○さ月の鏡（カヾミ）百練鏡（ヤウレンカヾミ）楊子江（ヤウスカウ）にて拵ル洞を
よく練ている焼るう（津文）
○宇治祭仙八日きんぐりと云事
いひ云事て仮るう
野よありけるう松と
よゐおよびるう ○室（ムロ）乃明神祭仙十三日
廿三日を江
坂本にて ○有無（アリナシ）日廿五日負惣云村止天皇の法服忌ゐ法会忌と
改事あ一又急用あ忌いり易事
もあるとうて出名あう ○家勝講（サイシヤウカウ）東大寺真福ち
四ケの大ち社領の中に碁古のきおくあ 近磐ち園城ち
五経を法涼夜ゐて講ゐら忌云事松（除）つまく まに法薄の庁とい
よるまあるそこの事ゐ年中行事お合
よ五月のみのうとよめ忌れあう ○賤給（レンキウ）ちいやーき民ゐ
米塩（ヨネシホ）なととゐ

あり京中乃傳里小話と多て拗非遠俤
うちたなりくこれをひく
北八日 ○おぐろぢし 俚は日 ○山田御田扇 ○芒種乃
節 五月 ○夏至 五月の中 ○ちつき雨 にてそれ ○梅の雨
徹雨 俚 墜栗 毛定はのふ 五月の廿二の壬乃日より
俵毛とて由左千草絵目よあ
○虎が洞乃図 俚北八日 虎吉お盛傷セ一処うち降とかくこへ
○祇園ぢ法事洗 俚北日 ○半夏生 五月の中より十一日
仕ち世俗よい廿日つとする者 めのうち日今よ
栄のおをふ舎といふ ○蝉乃幼虫 月今よ及ふ
○鶯毛入 俚月令よ及者毎色
○藻乃毛○藻毛 とち拾花よ訓学ト ○玄ぬ孤刈 花ち
花○百合 姫ゆり 俚多ゆりはうの
○さるすち ○ふ陽草 四ひく
○忘草ぢ花 萱草 俚 忘ふ
○石菖 ○花菖 ○金銀花 ○蕙 ○鼓菊 ○射菊
○萌 ○末摘花 紅の花 俚
○下野の花 俚
花葉よ似て 黒こ白もち

茅は ○寝渡筌子は木いちこ くくいちこ ○天蓼は ○蚊帳茅は ○かさごち茅は ○芝は ○苅子は ○早瓜は淡瓜ともいふ白瓜は干瓜 ○かうきは ○南天の花は ○ちつさ躑躅は ○生垣桃 ○花ざくろは ○榊乃茅は ○びや〳〵柳の花は ○椿 亀椿とよる花 ○ひのきちなんの茅花 ○青梅 ○杏子は ○桃 ○青山椒は ○茗荷こう ○子 ○女 ○田螺 ○子苗 ○青田 ○田草とるまくといふは五月なり ○栗 俚稗 稲 胡麻ほすころの老圃よろへし ○荻 ふは ○そらまめひくはうるい六月こもい ○蛍 ○蚊 ○蚊柱 ○水鳥の巣 ○かるのこ 鴨の子 ○ほや 負虫云 鶫の子 ○毛を磨る 鷹 ○羽ぬき 活毛をとるふ ○鵜川 鵜舟 鵜縄 ○鮎 ○鹿の子 ○猟狩 ○狐 ○照射 火串さん

きれた負惣云もしいと夏の扨ろ
て山中よりれい麻生大ま目をとわいをと引てをてとるべさ川おい
ろ精人（ウツラ）のるく○鶉乃巣（ス）俗○小鮒（コアヂ）は○水鮹（バモ）は○魚鮨（エリ）は
○ちつきやこ○菖蒲帷子俗音（アヤメカタビラ）○菅笠（ヒトヘ）俗○ろろ
ひろ日○はごろ毛日負惣云博ろ花というつるるとよ
津心わろきかろろれ津なれば夏よ
なふ
ろう

六月 ろなつき凡廿日 ろろかく日 学夏日 林撞 旦日 朝日
陽氷 ろろ一つきとよつきとみるつきとそうみい五日
ようく一つまあれ皆つきろるぶとそ子こ負惣云此日律林陸よあ
るもへ名付一と接の字よろまろくて此法をゆ一のろねと川ろ
いひあくふい○氷室（ムロ）一日 氷室の字よろまろ
あやまるこ 氷室の桜 氷餅祝子俗
負惣云氷室乃氷ハ四月一日より九月ろまて献（ソン）るおろれを六月一日
を行ろと用ふゆく今よお室ろるこ云く季吟集ろ四月より献るる
津い延喜式ろ氷或ろみくう熱月ろ用ふゆ氷（ヒ）ろ用ふゆ
おものとろこ保氏常友ろもろ氷（ヒ）ろ用ふゆ千載集ろ氷室
山より桜をそまろ津もあり又氷室の花乃世俗い氷餅を氷ろるぞらて箱日に用ひ侍り○忌火（イムヒ）乃
御飯（ゴハン）を供（ソナ）ろ朝日忌火といふ浄の火をかかろ津ろ日
ろ炊神今食の時神津をろよりおろろ

成(ナリ)〳〵内膳司よりたてまつるを大原(オホハラ)の
此世(このよ)にて彼世(かのよ)をぶるふ云々(うんぬん)と云(いふ)
いふよつれいおほし仍(よつて)る故(ゆゑ)に負態云酔(ヲビヱヒ)の字(じ)をかくとおやさけとも
よめりおほやけも夜(よる)六月一日(ろくがついちにち)より七月晦日(しちがつみそか)迄日毎(までひごと)にまつると公事
根源(こんげん)より○六月會(みなづきのつごもりのえ)四日(よつか)伴(とも)大師(だいし)の忌日(きにち)なれ〳〵延喜(えんぎ)ちよ
ておこなはる勅使(ちよくし)山(やま)の城(しろ)を加(くは)ふ
○御祓(ごだい)と御贖(おんあがもの)十日(とをか)神祇官(じんぎくわん)の官人(くわんにん)上(かみ)の玉(たま)袴(はかま)はきつゝし
こわらん事(こと)をとうるひ奏(そう)するなり(公事)
○月次(つきなみ)の祭(まつり)十二日(じふにち)これも六日(むいか)十二日(じふにち)二度(にど)祓(はらへ)
社(やしろ)へ御幣(ごへい)を奉(たてまつ)らせたまふ事(こと)あり(公事)
○神今食(じんごんじき)同日(どうじつ)これも年(とし)二度(にど)伊勢太神宮(いせだいじんぐう)を勅諚(ちよくじやう)
ありて天子(てんし)みづから神饌(しんせん)を供(そな)へさせたまふ事(こと)あり(公事)
○解斎(げさい)の御粥(おんかゆ)十二日(じふにち)神今食(じんごんじき)の次(つぎ)の朝(あした)の洗米(せんまい)
の大床(おほゆか)まで基豆(きづ)一御(いちご)とそ〳〵

佐(さ)なり白赤(しろあか)き出雲(いづも)和布(わかめ)乃(の)汁(しる)物(もの)を
そへあり三日(みつか)食(しよく)て御箸(おんはし)を下(おろ)すと云々(うんぬん)(公事)
○祇園會(ぎをんゑ)七日(なのか)多勝院(たしやういん)天延(てんえん)二年(にねん)六月(ろくがつ)六日(むいか)明応(めいおう)とよ和(わ)の家
かゝり七日(なのか)は条(でう)〳〵おわり乗(のり)
いまの四条(しでう)京極(きやうごく)乃御旅所(おんたびしよ)へ法性寺(ほつしやうじ)のくき是(これ)により宮(みや)と
云(いふ)○孟蘭盆會(うらぼんゑ)吉公(きこう)の忌(き)
告(つげ)ごと孟蘭盆(うらぼん)君(きみ)左右(さう)しかん
こゝろとのひまを
○菊水(きくすい)の作(さく)菊童(きくどう)と云(いふ)非(ひ)
人形(にんぎやう)にて菊(きく)の枝(えだ)をもたせ
○敲(ほう)打(だ)の作(さく)わらうの
人形(にんぎやう)あり○岩戸山(いはとやま)日本紀(にほんぎ)神代(かみよ)の
さうへたまよ
ていわれ

ことゝいふ事のおのづからそなはりて
声なこゝろもるゝにとゝ世のおもはれながきれをもるゝ神
かゝり○呂志山（カラテ）神功皇后三韓をうち給ふ松浦川を生て
釣つり給よしいひつたへたるより日本紀よりあり○孟宗山（モウソウ）木四孝乃事申に筍堀
ていしたる山也○琴彼山（コトワリ）氣求の戮達彼琴（モウギカイキンキ）
まをす○琴彼山或ハ伯牙彫絃をいふ何○白樂天山（ハクラクテン）乃林禅師茶
いつゝ楽を約て四善せし法名を仏法者ま行
の話をいふ○太子山（タイシ）聖徳太子の木よ彫奉りし像を堀給ふまことも枝の話
る神こ今の六角堂こ元亨尺書にを○木賊刈山（トクサカリ）ろくさ刈その茎山代木のもとをみ
○芦刈山（アシカリ）大和物語よ思ふてありつゝ書とおりなふ
いとなふをけるつゝいすこうきとよめるさなく○花
盗人山（ハナヌスビト）生ふる祥（ヌスビトハギ）をぬすびとゝいふ事ハ
あるひハ根茎をえびるを毒とおぼる祇そも
○山伏山○天神山（二）○仏立狩（二）
○十四日七日に市松ゐへ生給よ神去（ミコレ）
祇室のお社へ参詣る○楊弁慶山（ヤナギベンケイ）義経記る
しるへし○鯉山（コイ）詩門乃三級よ鯉乃のる神なり○
鮎子さよ山（アユコ）ま衆物語宇治合戦笹伊井ノ浄名一
本法師とゝ就よ柔うまを居ゆくあうらふゝ
出免あ巻とゝいるをゝて竹する山乃名なり
花の法にやをめるがとゝ○黒主（クロヌシ）古今序な
いつるをゝ物さうるいな○役行者（エンノキャウジャ）大峯役のうえをくゝ
角兄（キ）非（ニ）をもさゞめし

たるさ
はるう ○ 笠鹿山（スガカ）生ふる裸ものてふ（カ）ものてふ（カ）ものてふ（カ）

津ると
伝り ○伊勢の祭神 仏十六七日出ぬも
十六七日 すべるとあるも ○特多参 仏
筑紫 ○志渡ち祭 日十七日 殿破 ○座敷の涼さ 仏十九日
○富士詣 日は一日より廿日まで心望 本富士ともいへる四五月 ○洗手洗詣 仏 廿七日
より昔 ○鞍馬の竹切 日廿七日 ○参宮千日詣 日廿四日
まて ○橋立参 日廿五日 丹後 ○天満天神御祓 日廿五日も天満宮へ信吉の
より出て ○大坂産婆参 廿二日 ○賀茂みそぎ 日廿
祓と云 仏三十日 ○住吉のち祓 日 ○唐崎まつり 日かきをみとなる
すわり賀茂祭

手洗いむすびより出祓のふこ
のときづくりて出祓しの子供
舟路おろめおりてうちきけ
の名波とそうくき津わ
にきゐるまゝて
仏るまつり ○節折 廿日件にて上の御たけのすけ
よおりといふ心の節おりの令供竹をてまつりて御ぬぶ
とうり文主にきをはてうら
○大祓 廿日古祓川うくく
あうおとのうくく
うくくうち仏とふ芝ある神
うくくともおうにこうくくともいふ
うくくまで居ゆく麻を
うくくふさといふり ○形代 仏祓うたく形をつくりて身の災
祓とうくくてりまるる年あり

これをえこ ○茅輪（チノワ） 夏越祓（ナゴシノハラヘ）に用ゐる茅の輪（ワ）をいふ。
とゝいて茅の輪をくゞりぬけるとのゝしるなり ○夏神楽（ナツカグラ） 夏越祓のころより
のゝくるまで今も稚き神楽をまふ事とおもはるゝやらんときゝ侍れど来ざまに ○川社
祓 神代紀上 ○小蠅（サバヘ）なす神 貞観儀式 ○火祭 此日卜部氏の人火をきりて
とぞするとよめりさるなき事 五日本紀二 ○狭蠅（サバヘ）火祭 文徳の四乃角にて祭
ある火災をまぬかるゝ ○百郷祭（モヽサトノマツリ） 日四角四壁のかみまつる ト部氏人姫の四方の祓
たゝとあり（玄中記） ○雷鳴の陣（カミナリノヂン） 雷のなる三夜まで近衛の次
て忌籠（イミコモ）乃他方より来るを来訪よい事さゝめよ後上よ侍ふ
と侍ふてすたるとゝ四角四壁のまつりもいふ（玄中記）

○施米（セマイ） 東山西山小山などの山ちかき民に来ふ
ほどをおはやけよりとらせたまふ（玄中記）
○雷鳴の陣（カミナリノヂン） 雷のなる三夜まで近衛の次
て帝をまもり侍ふ事 西宮記に宮の御よ
のせうそこにとて公事根源も
六日の節（ヒ）
○温風（ウンフウ） 月令 ○暑（ショ）を祓（ハラヘ）ふ ○大暑
節六日の事 ○腐草蛍（フサウケイ）となる 月令 ○溽暑（ジョクショ） ○あ
き日 ○夕立 月令に大雨（タイウ）時行（ジコウ）とあるこれ ○天貺節（テンキヤウセツ） 六日宋
の真宗の祥符四年六月六日に天貺殿の額を下し給ひて六月六日を天貺節とやう書侍ふ事 ○三伏（サンフク） 夏至の後（ノチ）の庚の
日を初伏といひ第四

の庚と中伏といひ立秋の後初の庚を未伏といふこれを三伏といふこゝ夏い火と秋い金と交るよって一伝ずつ火盛るゆえれい金気伏くるゆえ心ま伏といひ伏祠と祀りて盛災(サイ)をふせぐにはは伏日より忌(キ)切(キリ)とて前日より一切(すべて)事(書之故事)素のゆえいと(書之故事)素のゆえいと(書之故事)素のゆえいと

○子桃(サモ)は ○楊梅(ヤマモ)は ○李(スモ)は ○林檎(リンゴ)は ○百日紅(ヒヤクジツコウ) ○梔子(クチナシ)やうやうとなつてこかるなつてこと川糸梔子ともいふ ○蓮(ハチス)若葉ともに食ふ実名石竹 ○蓮(ハチス)若葉ともに食ふ実名 ○浮萍(フモタ)ともいふ ○この実いと秋こ ○菱(ヒシ)の花は ○菱の花は実ハ秋こ ○蒲(ガマ)乃穂ともに ○浜松(ハママツ)うきくさ ○眼皮(ガンヒ)ともかく ○鉄線(テツセンクワ)花は ○凌霄花(ノウセンノハナ)は地名 ○きぬがしは ○きつね菜(カラシナ)は ○ぎぼうしは ○きつね菜は ○ぎぼうしは ○萱草(カンソウ)は一説ともいふ ○萱草(カンソウ)は ○萱草(カンソウ)は ○萱草(カンソウ)は

增續山井四季之詞上之終